

2019年11月24日 川越教会

私たちは神の宝

丸山 勉

[聖書] マラキ書 3章 13節～24節

あなたたちは、わたしにひどい言葉を語っている、と主は言われる。

ところが、あなたたちは言う

どんなことをあなたに言いましたか、と。

あなたたちは言っている。「神に仕えることはむなし。たとえ、その戒めを守っても
万軍の主の御前を 喪に服している人のように歩いても 何の益があろうか。

むしろ、我々は高慢な者を幸いと呼ぼう。彼らは悪事を行っても栄え

神を試みても罰を免れているからだ。」

そのとき、主を畏れ敬う者たちが互いに語り合った。主は耳を傾けて聞かれた。

神の御前には、主を畏れ、その御名を思う者のために記録の書が書き記された。

わたしが備えているその日に 彼らはわたしにとって宝となると 万軍の主は言われる。

人が自分に仕える子を憐れむように わたしは彼らを憐れむ。

そのとき、あなたたちはもう一度 正しい人と神に逆らう人 神に仕える者と仕えない者との
区別を見るであろう。

見よ、その日が来る 炉のように燃える日が。

高慢な者、悪を行う者はすべてわらのようになる。

到来するその日は、と万軍の主は言われる。彼らを燃え上がらせ、根も枝も残さない。

しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには

義の太陽が昇る。その翼にはいやす力がある。

あなたたちは牛舎の子牛のように 躍り出て跳び回る。

わたしが備えているその日に あなたたちは神に逆らう者を踏みつける。

彼らは足の下で灰になる、と万軍の主は言われる。

わが僕モーセの教えを思い起こせ。わたしは彼に、全イスラエルのため
ホレブで掟と定めを命じておいた。

見よ、わたしは 大いなる恐るべき主の日が来る前に

預言者エリヤをあなたたちに遣わす。

彼は父の心を子に 子の心を父に向けさせる。

わたしが来て、破滅をもって この地を撃つことがないように。

[序] マラキの時代と現代への問い

いよいよ11月も今週一杯で終わり、来週の日曜はもう12月です。その12月1日
からクリスマスを待ち望む、待降節<アドベント>に入ります。

先週は「こども祝福礼拝」を守り、『聖書教育』の聖書箇所をお休みしましたけれども、また今日から『聖書教育』に沿って御言葉から聴いて行きたいと思います。

今日は「マラキ書」の御言葉を読んで頂きました。旧約聖書の最後です。新約聖書への橋渡し役と言っても良いでしょう。ただ、この預言者マラキがどういう人物であったか、それはよく分からないようです。「マラキ」という言葉も、3:1にある「見よ、私は使者を送る」という言葉の「使者」という言葉が「マラキ」ということから、匿名の人物にこの名が付けられたのではないかとされています。ただ、その預言の中身から、彼が活動したのは、イスラエル民族のバビロン捕囚帰還を経、破壊された神殿の再建も終わり、城壁も修復された後のことのようにです。そうならば、人々は喜んで神様を礼拝する日々であったかと言うと、人々はむしろ神様に対して不信と懐疑の中にありました。それは、「本当に神などいるのだろうか」「神などいてもいなくても同じだ、少しも恵んでくれないではないか」という思いです。これは結構、現代的な問いでもあるのではないのでしょうか。

[1] 神を中心にする生き方は益がないと

マラキ書の 3:14～15 にはこうありました。「あなたたちは言っている。「神に仕えることはむなし。たとえ、その戒めを守っても、万軍の主の御前を、喪に服している人のように歩いても 何の益があろうか。むしろ、我々は高慢な者を幸いと呼ぼう。彼らは悪事を行っても栄え、神を試みても罰を免れているからだ。」

彼らは律法に則り祭儀も行い、欠かさず礼拝も捧げているのです。表面上は。この言葉は、彼らの「心の声」なのではないかと思いました。これだけ祭儀も行い、神の名を唱えているのに、少しも豊かな繁栄が戻ってこない、それどころか早魃、凶作、外圧…少しもよくなる。「神の戒めを守り、まるでその御前を、喪に服している人のように歩いても何の益もない。もう神を中心におく生活はやめてしまおう。神などいないと考え、生きるほうが賢い生き方だ」とそう考えたのです。

そういう民に向かって、この預言者マラキは、一方でかなり厳しい言葉を語ります。例えば、3章の5節です。「裁きのために、わたしはあなたたちに近づき、直ちに告発する。呪術を行う者、姦淫する者、偽って誓う者、雇い人の賃金を不正に奪う者、寡婦、孤児、寄留者を苦しめる者、わたしを恐れぬ者らを、と万軍の主は言われる。」

神様を中心に置くことを失った彼らは、神様との関係だけでなく、人間同士の間でも「自分さえよければ」になってしまった。軸がブレるとそうなります。そういう人間の姿を神様の目は見過ごしにされません。「裁きのために近づく」と。これは本当に厳しい言葉です。しかし、見過ごしにしていけないことは、では旧約聖書の神様は、ただ裁きの神、恐ろしい神様なのかということとそんなことはないのです。「裁き」というのは、「滅ぼしてやる」ということではなく、むしろ、神様からの「呼び

かけ」なのです。「私はあなたを愛している。だから帰ってきて欲しい」という。6～7 節にこうあります。——「まことに、主であるわたしは変わることがない。あなたたちヤコブの子らにも終わりはない。あなたたちは先祖の時代から わたしの掟を離れ、それを守らなかった。立ち帰れ、わたしに。そうすれば、わたしもあなたたちに立ち帰ると 万軍の主は言われる。」神様という方は、いわゆるパワーハラズメントをなさる方では無いのです！ 忍耐して待っておられるのですね。人間が自主的に帰ってくることを。

[2] あなたは「神様の宝」なのだ

親と子の関係で考えてみてもこのように言えるかもしれません。力関係で言ったら親の方が圧倒的に強い訳です。その親が、もし子供をもうお前は私の子供ではないと追い出したり、見限ったりしたら、子供は絶望してしまうでしょう。それは最も温かい愛情のシャワーを受けなければならない存在から、冷や水を浴びせられるようなものだと思います。それは親の方が問題ですよ。けれども聖書の神様は決してそうではありません。「旧約聖書の神様は怖い」と言う方もあるかもしれませんが、旧約聖書で語られている神様も、私たち人間が罪深くとも、どこまでも人間を見捨てず、人間に目を留め、忍耐して待っておられる神様なのです。

このマラキ書の 3 章 16 節以下で、このような神様に頼ることなど愚かなことだという空気が蔓延している中で、神様との関係を正していこう、神様にもう一度立ち返り、その交わりに中に生きていこうとする者のことを、神様は、「わたしにとって宝となる」のだ、「人が自分に仕える子を憐れむように わたしは彼らを憐れむ。」(17 節)とおっしゃいました。—この「宝となる」の「宝」とは、元々、「私的な財産」とか「所有物」といった意味があるようです。私たちは、神様の手の中にあるもの、“神様の所有物”=価値ある宝なのだ、と言っています！ それは、ここで言われているように、ただ神様の憐れみ、つまり愛ゆえなのだ、と言っているのです。

私たちは、神様というお方を、実は知らないのだと思います。知らないから、いたずらに恐がったり、或いはそんなような存在は自分とは関わりがないと思ったり、又は自分流の「神様像」を作って、その「神様像」が崩れるような場面に出会うと、自分は神様に裏切られたとってしまうことがあるのではないのでしょうか。実は、聖書の中には、そんな人物が沢山出てきます。いや、そういう人ばかりだといっても良いかも知れません。しかし、そんな自分の中の「神様像」が崩されることは、大事なことだと思います。聖書の神様は、人格を持ったお方です。このお方は、人間のために本当に悲しみ、また怒り、葛藤するお方です。心を動かされるのです。何のためでしょうか？——私たち人間は、神様の「宝」なのです。その宝、宝としての神様の持ち物が、ご自身のもとから離れてさまようことを見ていられない方だから、その者が帰って来ることを待ち続け、心を痛められるのです。

[3] バプテスマのヨハネ、そしてイエス・キリストの到来へ

旧約聖書の中の沢山の「預言書」には、そのような神様の「声」が溢れています。「帰れ」、「わが許に立ち返れ」と。その預言書の最後がこの「マラキ書」です。このマラキ書の最後、つまり旧約聖書の最後の部分は、先ほど読んで頂いた次の言葉です。

「見よ、わたしは 大いなる恐るべき主の日が来る前に
預言者エリヤをあなたたちに遣わす。
彼は父の心を子に 子の心を父に向けさせる。
わたしが来て、破滅をもって この地を撃つことがないように。」

神様は、神様のもとを離れた人間に、破滅の裁きを下してピリオドを打つということを行っていませんでした。そうではなく、人間が神様の所に帰れるように、私は道を備える者としてエリヤを送ると言います。この預言は、新約聖書の福音書に受け継がれました。特にこのマラキの言葉は、救い主イエス・キリストの到来の前に、その先ぶれをし、今や神の救いの時が満ちたことを告げるバプテスマのヨハネが生まれた時に、ルカによる福音書は、初めの所で、「彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」(ルカ 1 : 17) と、その繋がりを明確に語っています。

そして、イエス・キリストというお方が登場します。来週の日曜日から、教会暦ではいよいよそのイエス様の誕生を待つアドベントになるわけですが、これは、旧約聖書の民たちが待ち望んでいたメシア像とはある意味かけ離れていたのです。“もっとイスラエルの国を復興させてくれる救い主、あのダビデ・ソロモン時代の繁栄を回復し、人々に豊かさと自信を与えてくれる” そのような政治的な救い主を多くの人々は思っていました。イエス・キリストはそのような方としては来られません。そうではなく、彼はイザヤ書の言葉を借りれば、「傷ついた葦を折ることなく暗くなってゆく灯心を消すことない」(イザヤ 42:3)、とあるように、真に人の心に寄り添い、私たちの痛みを知る方として来られたのです。私たちが努力して神様に近づくのではなく、神様が私たちの心の声に耳を傾け、私たちの人生に寄り添う為に降って来て下さったのです。 「クリスマス」というのは、そのような時です。

[4] サマリアの女性と主イエスとの出会い

私たちは、今、聖書を通して、この主イエス様と出会うことが出来ます。聖書に記されている、このイエス様と出会った一人の女性のことを最後にご一緒に考えてみたいと思いますが、それはヨハネによる福音書 4 章にある「サマリアの女性」です。長い物語ですので今はお読みしませんが、後でゆっくりお読み頂ければと思いますが、

この人目をはばかり生きていた孤独な女性は、イエス様と出会ってその喜びのあまり、それまでは距離を置いていた周りの女性たちに「この人こそメシアかも知れません、さあ、あなたも見に来てください」と言い広めた、とあります。それ程**変えられた**のです。

この女性は、ユダヤ人ではなく、サマリア人でした。サマリア人はユダヤ人からは**差別**を受けていたと言ってよいでしょう。そのサマリアの女性が、井戸端でイエス様から声を掛けられたところからこのドラマは始まります。「**私に水を飲ませてほしい**」と懇願したのです。まず**イエス様の方から近づかれた**のです。女性からは出来なかったし、考えてもいませんでした。彼女は驚きました。「**ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか**」と言いました。

このあと二人の対話はグッと深まっていくのですが、その中で、この女性の素性が浮かび上がってきます。イエス様はこの女性が、既に五人の夫と別れ、今も一緒に暮している人がいるけれども、その人は夫では無いということをご存知でした。**人間の愛を求めては裏切られ、或いは失望し、そんなことを繰り返して生きてきた女性**だったのです。砂漠の暑い真昼間、その時間を選んで飲み水を得るために瓶をかかえて、オアシス、井戸にやってきた女性です。自分が心を開いて話せる友人もなく、また自らも引きこもって生活し、誰にも会わなくて済むその時間に来たのでしょうか。

そこで思いがけず、自分に「水を飲ませて欲しい」と下手に願い出て来る不思議なユダヤ人男性に声をかけられたこの女性は、今度は自分から色々話し始めるのです。初めは「あなたは一体どなたですか」という所から、旧約聖書のヤコブの井戸の話になり、遂には、生活の水の話ではない、永遠の命に至る水の話に至って、この女性は思わず、この**イエスに向かって求める**のです。4章15節。「**主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。**」女性はここでもう「主」と呼び始めています。そして、話は核心に向かいます。「**あなたの夫をここに呼んできなさい**」とのイエス様の言葉に、この女性は驚き、「ああ、この人は私の人生の全てを知っておられ、その上で、永遠の命に至る渴かない水を下さると言っているのだ」と思い、心が開いてゆきます。その後話は、**礼拝をする場所**の話に至ります。当時ユダヤ人とサマリア人は反目し合っていましたから、一方は**エルサレム**で、一方はサマリアの**ゲルジム山**で神様を礼拝していましたけれども、イエス様は驚くべきことをおっしゃったのです。少しお読み致します。

「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。まことの礼拝をする者たちが、**霊と真理をもって父を礼拝する時**が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は**霊**である。だから、神を礼拝する者は、**霊と真理をもって礼拝しなければならない。**」

女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」(4:21,23-26)

「礼拝」とは場所の問題ではない、また何か決まりきった儀式を行うのでもない、イエス・キリストによって示された神様を心から信じ、礼拝すれば良いのだ、そのような**新しい時代**がやってきたのだよ、とイエス様は言われたのです。この女の人は本当に喜びました。もう水を汲みに来たことも忘れ、瓶を置き、たちどころに町の女性たちに「**来てごらんなさい。この人こそメシアかもしれません**」と、人々をイエス様の許に誘ったのです。がんじがらめにされていた**見えない鎖**から解放されました。引きこもってはいられなくなりました。丁度マラキ書の中にあつた「**あなたたちは牛舎の子牛のように 躍り出て跳び回る**」(3:20)ということが彼女の身に起こったのですね。

[結] 神様の「宝」として、主を讃える

これが、イエス様が下さる救いです。「**自分**」からの解放です。ここには**永遠の生命**があります。**罪の赦し**があります。イエス様は、私たちの人生を知り尽くされ、その上で、私たちを“裁く”のではなく、憐れんで下さいます。愛して下さいます。イエス様は「**私は良い羊飼いである。私は自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。私は羊のために命を捨てる**」(ヨハネ 10:14, 15)と言って下さいました。それほど関係なのです！ イエス様はこのサマリヤの女性のために命を捧げて下さったお方です。そして、私たちもそうです。私たち一人一人の為にも、死に至るまで、私たちの痛みを負い、私たちの心の叫び・声を聞き、また、罪を赦し、一緒に歩んで下さるお方です。

私たちは、今、この上ない大切な「**神様の宝**」とされています。神様の手の中にしっかりと握りしめられているのです。

心からの喜びをもって主を讃え、クリスマスを待ち望みたいと思います。

お祈りを致します。